

平成 21年 6月 25日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19520467
 研究課題名（和文） 日本語学習者および日本語母語話者の文章表現における「視点形成」に関する研究
 研究課題名（英文） Research Concerning “Formations of Viewpoints” in the Writing of Japanese Language Learners and Japanese Native Speakers
 研究代表者
 坂本 勝信（SAKAMOTO MASANOBU）
 常葉学園大学・外国語学部・講師
 研究者番号：40387501

研究成果の概要：日本語レベル上昇により、文章表現における視座統一度が上昇するのかを検証した。以下結果の一部を報告する。日本語母語話者は、小学校低学年において既に日本人大学生と変わらぬ視座統一の実態を有していた。一方、海外の中国語母語話者の同割合は、日本語母語話者に比して、非常に低いことが判明した。同時に、中級後期の学習者は同前期の学習者と比較し、視座統一度が上昇しており、日本語レベルと視座統一度との関係性を示唆する結果となった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,200,000	660,000	2,860,000
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：視点、視座、構文の手がかり、視座統一度

1. 研究開始当初の背景

近年複数の先行研究により、口頭描写および、文章描写における日本語学習者の視点の問題が取り上げられてきた（渡邊 1993；田代 1995；田中 1996；坂本・康 2000；坂本・康 2004；坂本 2005；奥川 2006）。その中には、物語やアニメーションを描写する場合、日本語母語話者が主人公中心の視座（視座：受身形、使役形、使役受身形、授受動詞、授受補助動詞などの構文的手がかりによって決定されるもの〔坂本（2005）の「視座」の定義による〕）から描くことが多いのに対し、日本語学習者は視座が不統一だと主張するもの

があった。つまり、主人公への視座統一度が低いという指摘である。また、同時に、日本語レベルが上昇すれば、視座統一度が上昇すると指摘する研究も見られた（坂本 2005）。

以上のように、視座に関する実証的研究は複数あるものの、どの研究も対象者の数が多くなく、また、日本人児童については、手が付けられていないという状況であった。

2. 研究の目的

日本語母語話者（小学校低・中・高学年・大学生）および、国内・海外における中級・上級レベルの日本語学習者（英語・中国語母

話者)の視座統一の実態を量的に調査することである。これにより、先行研究で主張された、日本語学習者の文章のわかりにくさと視点の問題との関連性が実証されると考えた。

また、「視点教育」の必要性を明確にした上で、実施時期(対象レベル)や回数などを含めた指導カリキュラムを考案することである。

視座統一の実態調査については、第一に、坂本(2005)の「日本語レベル上昇に伴う、主人公への視座統一度の上昇」をもとに、同現象が日本語母語話者、及び、日本語学習者においても観察されるかを調査することである。第二に、ストーリー性のある漫画の「内容を知らない」人に伝えるように描写した場合(自由視座)と主人公になりきって描写した場合(固定視座)とでどのような差が生じるのかを明らかにすることである。第三に、国内での学習と海外での学習における視座に関する差異を探ることである。

3. 研究の方法

調査は主に先行研究(渡邊 1993; 田代 1995; 坂本 2005 など)において実施されているように、ストーリー性のある漫画を描写するストーリー・テリング法によって採集した。対象者は、日本語母語話者(低学年児童 30名、中高学年児童 17名、高学年児童 37名、大学生 46名)と中国語を母語とする日本語学習者(海外:中級前期 26名、同後期 31名 [以上横断的調査] / 中級前期・後期 10名 [以上縦断的調査]、国内:中上級 22名)および、英語を母語とする日本語学習者(海外:中上級 15名、国内:中上級:44名)で、「視座の実態」を分析・考察する材料とした。なお、上記日本語学習者は構文的手がかりの習得度合いを測る文産出テストで一定の成績をおさめた者である。

使用した漫画は構文的手がかりの使用がなされるように筆者が考え、イラストレーターが描いたものである。以下描写文の一例である。

「ある日お兄ちゃんと妹がボールで遊んでいたが、兄は妹からボールを奪ってしまった。妹は泣いて、家に帰っていった。お兄ちゃんが一人で遊んでいると、そこへ妹がお母さんを連れてやってきた。お兄ちゃんは、お母さんにひどく叱られ、罰として掃除をさせられた。お兄ちゃんは自分のしたことを反省して一生懸命掃除したので、お母さんにほめられ、褒美にケーキをもらった。それを妹が見ていて、ほしそうにしていたので、お兄ちゃんはケーキを半分に割って、妹にやった。」

このように「兄」が主人公、「母」と「妹」が脇役である漫画を用いた。

ストーリー・テリングの詳細だが、上記 10

コマ漫画を見せ、まず、漫画の「内容を知らない」人に伝えるように描写させ(自由視座)、次に、主人公になりきって描写させた(固定視座)。

視座の定義は、坂本(2005)に倣い、受身形、授受補助動詞、使役受身形、及び、本動詞「くれる／もらう」、「やる／あげる」、「使役形／使役的他動詞」を構文的手がかりとして決定されるものとした。また、視座を坂本・康・森脇(2009)に倣い、「主人公のみ」、「主人公と他の人物(一人)」、「主人公と他の人物(二人)」、「主人公以外の人物」の 4 分類を設定した。

なお、視座のデータはすべて百分率を用いて算出した。

4. 研究成果

主な調査結果と考察は、次の通りである。

まず自由視座について述べる。第一に、日本語が未熟な低学年児童(小学 2 年生)は、4 年生、5 年生、および、大学生と比較して、「主人公のみ」の視座から描写する割合が低いことはないことが明らかになった(小学 2 年生:50.0%、小学 4 年生:41.2%、小学 5 年生:40.5%、大学生:39.1%)。幼いころから周りの発話をはじめとする、周囲のインプットが要因にあるのではないかと推察される。

次に、海外の中国語母語話者について、横断的調査では、「主人公のみ」からの描写割合は、中級前期が 3.8%、同後期が 9.7%と日本語母語話者と比べ、大変低い値であった。その特徴をよく示すのが「母は兄に掃除をさせる」と「兄は母に掃除をさせられる」の 2 通りの描写が可能なコマである。基準となる日本人大学生の場合、使役受身形を用いて「兄」の視座から描写した者が約 70%、使役形を用いて「母」の視座から描写した者が約 30%であった。一方、学習者については、中級前期の 76.9%が、同後期の 93.3%が「母」の視座からの描写となり、日本語母語話者とは対照的な結果であった。

しかし、同時に、「主人公のみ」からの描写割合は、日本語レベル上昇に伴い、上がっており、坂本(2005)を支持する結果となった。

また、縦断的調査でも同様の現象が観察された。

一方、国内の中国語母語話者(中上級)の同割合は、22.7%と、海外と比較すれば高いものの、日本語母語話者の約半分の値であった。

第三に、英語母語話者(中上級)についてだが、海外が 20%、国内が 18.2%とほぼ同じであり、学習環境の違いによる差は観察されなかった。

本研究に限って言えば、日本語学習者の主人公への視座統一度は、日本語母語話者のそれを大きく下回り、特に海外の中国語母語話者においては、その現象が顕著であることが明らかとなった。

日本語学習者との比較における日本語母語話者の視座統一度の高さは、既に小学校低学年（2年生）において、ある程度確立していると考えられる。森田（2006）は、話者自身が「文中の人物」の立場に立ち、事態のなりゆきを体験的に述べる場合には、日本語は受け手の立場に立って叙述することが極めて多く、自身がある状況にさらされている様を、「受けの姿勢」ではなく、傍観者的に叙述説明する態度は、あまり日本語的と言い難いとしている。ここで言う「文中の人物」とは、本研究における主人公「兄」に、「受けの姿勢」とは、受身形や使役受身形、「もらう／くれる」「てもらう／てくれる」などの構文の手がかりに相当すると言いうるだろう。言い換えれば、このような構文の手がかりを使用し、主人公の立場に立って、描写することが日本語的であると捉えることができる。

また、英語と中国語の言語間の差異については、国内の中国語母語話者と国内外の英語母語話者が似た特徴を有しており、唯一、海外の中国語母語話者の視座統一度の低さが目立つ結果となった。

以上、自由視座について、述べてきたが、以下で固定視座について述べる。

日本語母語話者は、すべての対象グループにおいて、約80%から90%が「主人公のみ」の視座から描写しており（小学2年生：83.3%、小学4年生：82.4%、小学5年生：91.9%、大学生：89.1%）、単に漫画の「内容を知らない」人に伝えるよう指示した場合（自由視座）と比較して、大きく主人公への視座統一度が上昇した。これは、書き手である児童や大学生自身が「視点人物（＝誰が見るのか）」となり、自分の視座から描写することになったためだと思われる。

次に、海外の中国語母語話者だが、中級前期が46.2%、同後期が48.4%と、いずれも40%台後半であり、日本語母語話者の同値を大きく下回った。これにより、海外の中国語母語話者は視座を登場人物間で移動させながら描写していることが判明した。自然な日本語で描写するためには、視座を固定させるための練習が必要であると考えられる。一方、国内の中国語母語話者の同割合は、81.8%と日本語母語話者に近い割合であった。

第三に、英語母語話者についてだが、海外が73.3%、国内が70.5%とほぼ同じ値であった。海外の中国語母語話者のような低さはないが、日本語母語話者に比して、10%から20%低い割合である。

本研究に限って言えば、「主人公になりきって書け」と指示を受けた場合（固定視座）、日本語母語話者の基準となる日本人大学生は、約9割が「主人公のみ」の視座から描写している。つまり、自らの出来事について書く場合、日本人はほぼ書き手自身の立場から描写すると言いうるだろう。小森（2006）は「必ずしも文章全体を通して視座を統一しなければいけないわけではないため、どんな場合に視座を移動させてもよいのかという基準が出せない」と述べているが、それは「自由視座（＝単に物語の「内容を知らない」人に説明するように描写する）」のケースにのみ該当すると推察される。

本研究では、海外、国内の英語母語話者が約70%強、海外の中国語母語話者に至っては、40%台後半しか「主人公のみ」の視座から描けなかった。

これから特に、海外の中国語母語話者に対する「視座統一」の指導が必要であると思われる。受身や使役、授受補助動詞などの学習を済ませた学習者には、それら構文の手がかりを使用して、自身の出来事を自らの立場から眺め、視座を統一して日記や作文を書く訓練を取り入れる必要があるのではかと考える。

以上、研究成果について述べてきたが、本研究の申請時の主目的が、視座統一の実態を「量的」調査によって、明らかにすることであった点から考えると、当初予定したデータ数を十分に採集できなかったと言わざるを得ない。今後継続して調査を実施し、一定数のデータを得る必要があるだろう。また、「視点教育」のカリキュラム考案についても、課題として残った。今後の調査結果を基に、「視点教育」の必要性を明確にした上で、実施時期（対象レベル）や回数などを含めた指導カリキュラム作りに着手したいと考えている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

- ① 坂本勝信・康鳳麗・森脇健夫、「中学年の日本人児童の物語描写における『視座』の実態について—日本人大学生との比較を通して—」、『常葉学園大学研究紀要（外国語学部）』、25 巻、p205-p213、2009 年、査読無
- ② 坂本勝信・康鳳麗、「日本語母語話者の視点の実態について—『視座の統一度と文章のわかりやすさの関係』調査と共に—」、『常葉学園大学研究紀要（外国語学部）』、24 巻、p205-p217、2008 年、査読無

[学会発表] (計 3件)

- ①坂本勝信・康鳳麗・森脇健夫、「日本人児童の文章表現における『視点形成』の実態―低・中・高学年児童と大学生の比較を通して―」、日本語教育学会研究集会第10回、2008年12月20日、山口大学
- ②坂本勝信、「文章描写における日本人と中国人の『視点』に関する研究」、三重大学学内GP「DD (Double Degree) プログラムにおける日本語教育についての協同研究」、2008年12月6日、三重大学
- ③坂本勝信・康鳳麗・森脇健夫、「日本人児童の文章表現における『視点』の実態について～『視座統一』を促す指導法を考えるために～」、日本語教育学会研究集会第11回、2008年3月1日、立命館大学

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

坂本 勝信・常葉学園大学・外国語学部・
講師・40387501

(2) 研究分担者

①康 鳳麗・鈴鹿医療科学大学・鍼灸学部・
講師・30399034

②森脇 健夫・三重大学・教育学部・
教授・20174469